

## 使徒の働き18章 「腰を据えた宣教」

### 1A コリント宣教 1-17

1B 同労者との出会い 1-4

2B 腰を据えた宣教 5-11

3B 守られたパウロ 12-17

### 2A エペソ宣教へ 18-28

1B 短期間の滞在 18-23

2B 種を蒔いた人たち 24-28

## 本文

使徒の働き 18 章を開いてください。私たちは、前回、パウロがアテネにおいてどのように宣教をしたのかを見てきました。18 章はその続きですが、宣教に大きな変化が起こります。それは、パウロが反対や迫害があったものの、長期に渡って腰を据えて留まることができたことです。コリントの町で、一年半以上留まることができました。次にエペソに向かうこととなりますが、そこでの宣教は二年以上に及びます。パウロが長期にいた、これらの場所で、パウロ、シラス、テモテ以外に、出会いによって与えられた同労者たちも出てきます。そのような相互の働きによって、二つの町に教会が建て上げられていくようになります。

### 1A コリント宣教 1-17

1B 同労者との出会い 1-4

<sup>1</sup>その後、パウロはアテネを去ってコリントに行った。

午前礼拝でコリントの町について、説明しましたが改めて説明します。コリントは、アテネから西に 80 キロほどのところにあります。私たちもアテネからコリントの旅に加わりましたが、次第に、地峡に近づきます。つまり、東にはエーゲ海、西にはイオニア海に挟まれていて、両側に海が見えてくるようになります。そしてついに、コリントス運河と呼ばれる運河を見ました。たいそう深い運河で、80 キロ近くあります。両側が切り崩され崖になっていました。その下を、わずか 25 キロのプールのほどの幅しかないので、ぎりぎりのところを船が、小さな船に引っ張られて牽引されていくのを見ました。それからもう少し走ると、コリントスというのどかな町が見えます。その中に、かつてのコリントの中央のところにあった遺跡があります。そして山がそびえています。アクロコリントスと呼ばれるアクロポリスです。その山頂に、アフロディーテ神殿の遺跡があるそうです。

パウロがここに来たローマ時代には、なんと 60 万人もいた、帝国で第四の町でした。ギリシアの町で、ローマ軍に抵抗したため、紀元前 146 年に滅ぼされました。けれども、アドリア海とエーゲ

海の地峡にあるこの町をそのままにしておくのは忍びなく、ユリウス・カエサルが再建して、植民都市としました。そして、ローマのアカイア州の首都となります。

コリントの町のすごいのは、二つの港を持っていたことです。アドリア海のコリント湾には、レカイオンという港、そして、エーゲ海のサロニコス湾には、後で出て来るケンクレアという港があります。その間を、船から積み下ろされた荷物が、もう一方の湾に移動していきました。小舟を台座に載せて動かしていったようです。このようにして商業都市として栄え、午前礼拝で話しましたように、水夫たちがここで自分の欲を発散させる場所となり、道徳的にめちゃくちゃな場所となりました。それを支えていたのが、アフロディーテの神殿で、そこに千人の女祭司がいて、夜になると山から下りて行き、彼らを売春しました。それで神殿の運営資金にしていたのです。

ともかくすごいとことで、コリント人への手紙第一を読めば、教会として建て上げられたけれども、数々の肉の行いに関わる問題が噴出していることが分かります。分裂の問題、淫乱の問題、偶像礼拝の問題、聖餐式や愛燦会で我先に食べ物を食べてしまう問題、それから復活はなかったという教えが入り込んでいました。しかし、パウロがどれほど彼らを父親のようにして愛し、彼らがめちゃくちゃだからこそ、ますます時間をかけて、愛と情熱を惜しまずに与え続けたことが分かります。

<sup>2</sup> そこで、ポントス生まれでアキラという名のユダヤ人と、彼の妻プリスキラに出会った。クラウディウス帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命じたので、最近イタリアから来ていたのである。パウロは二人のところに行き、<sup>3</sup> 自分も同業者であったので、その家に住んで一緒に仕事をした。彼らの職業は天幕作りであった。

パウロが、この時点で独りでありました。テモテとシラスは、パウロがベレアを去った時には、ベレアに留まっていた。パウロがアテネについてから、追い付きましたが、再びテモテは、マケドニアのテサロニケに行きました。ですから、独りだったのです。その時の彼の状態が、午前礼拝で話したように、「弱く、恐れおののいて」いたのです（Iコリント 2:3）。

しかし神は、貴い同労者を彼に与えてくださいました。アキラとプリスキラという夫婦です。ポントスとは、トルコの北のビティニアにあったところで、そこからのユダヤ人です。パウロの手紙では、プリスカとなっています。プリスカが正式な名前で、プリスキラが親しみを込めた呼び名です。この二人は、ローマにいた人たちですが、ここにあるように、クラウディウス帝が、全てユダヤ人をローマから退去するように勅令を出したとありますが、それが紀元 50 年頃とされています。ですから、使徒の働きは、この時点でイエス様がよみがえられてから約 20 年経っているということですね。

ところで、ローマ人の反ユダヤ感情については、ピリピにおいて、パウロたちを捕らえた者が、「彼らはユダヤ人でして」と言ったところに既に表れていました。ローマでも、こういった反ユダヤの

勅令を出したということがあります。とても複雑ですが、ユダヤ人はキリスト者に対する迫害を行いました。ローマに取り入って、カエサル以外を王にしていると言ってイエス様を十字架につけ、また使徒たちを迫害する時の理由にしました。けれども、ローマにおいてユダヤ人は、社会的な地位は認められていたものの、このように彼ら自身も迫害される傾向にありました。そして、後に、同じ唯一神を信じるキリスト者も、ローマから直接の迫害対象となります。それは、皇帝ネロの時です。今も、キリスト者に対する激しい迫害が世界中であります。同じように反ユダヤ主義による迫害も世界中にあります。

追放は残念な出来事ですが、主はこれをパウロの同労者として加えることに用いてくださったのです。パウロが来る前に彼らが既に信仰を持っていたので、彼らがどの時点で信仰を持っていたのか？なのですが、五旬節の時、聖霊が降って、その時に世界中からエルサレムに集まって来たユダヤ人が、福音を聞き、悔い改め、三千人の男がバプテスマを受けました。アクラとプリスキラもそこから直接、信仰へのきっかけが与えられたのかもしれませんが。

そして興味深いのは、二人は天幕づくりで、自分たちの家を既に持っていたようです。商売がうまくいっていたのでしょう。コリントの遺跡には、商店が立ち並んでいる遺跡も見つかっています。二階で住み、一階をお店にしていたのでしょうか。そしてパウロが同業者でありました。ユダヤ教のラビは、給料をもらいません。自分で働きます。テサロニケ人への手紙第二で、「働かない者は、食べてはいけない」ということが書いてあります(2章)。それは、ユダヤ教の人たちにある考え方もあり、パウロは教師でありながら、手に職も持っていました。天幕作りですが、革製品です。革ですと防水に適しています。そして、商売相手はローマ軍であったりします。ローマ兵が、革製品の天幕やその他付随する革製品のを購入します。ですから、結構、商売がうまく行っていたのだと思います。

パウロは何度となく、自分は福音宣教の働き手であるけれども、その権利を敢えて使わなかったことを話しています。コリント人への手紙第一で多く話していますが、それは、一つは模範を示すため。それから、教会の支えから私腹を肥やす偽教師が巡回していたりしたからです。

<sup>4</sup>パウロは安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人やギリシア人を説得しようとした。

いつものように、パウロは安息日ごとに論じていました。

## 2B 腰を据えた宣教 5-11

<sup>5</sup>シラスとテモテがマケドニアから下って来ると、パウロはみことばを語ることに専念し、イエスがキリストであることをユダヤ人たちに証した。

マケドニアから、シラスとテモテが戻ってきました。その時に、ピリピからの支援金も携えてきたのかもしれませんが。ピリピ人への手紙には、パウロが何度となく支援を彼らから受け取っていることを言及しています。「ピリ 4:15 ピリピの人たち。あなたがたも知っているとおりに、福音を伝え始めたころ、私がマケドニアを出たときに、物をやり取りして私の働きに関わってくれた教会はあなたがただけで、ほかにはありませんでした。」それで天幕作りは中断して、みことばを語ることに専念できました。働き人への支援が、いかに福音の働きを前進させることができるかが分かります。

これまでおそらく、これまでは聖書からキリストが苦しみを受けて、それから栄光の中に入るということを論じていましたが、時間が足りなかったのでしょう。今は、「イエスがキリストであることをユダヤ人たちに証した」とあります。イエスが、そのキリストであるということを聖書から完膚なきまでに証言したのです。

<sup>6</sup> しかし、彼らが反抗して口汚くののしったので、パウロは衣のちりを振り払って言った。「あなたがたの血は、あなたがたの頭上に降りかかれ。私には責任がない。今から私は異邦人のところに行く。」

ピシディアのアンティオケで起こったことが、再現しました。ユダヤ人たちが口汚く罵ったので、パウロとバルナバが、足の塵を払い落とし、そこから出て行きました。そして、「13:46 見なさい、私たちはこれから異邦人たちの方に向かいます。」と言っています。パウロの念頭には、主がエゼキエルに、預言者が語らなければいけない義務について語られた言葉があったことでしょう。「エゼ 3:17-19 人の子よ。わたしはあなたをイスラエルの家の見張りとした。あなたは、わたしの口からことばを聞き、わたしに代わって彼らに警告を与えよ。わたしが、悪い者に『あなたは必ず死ぬ』と言うとき、もしあなたが彼に警告を与えず、悪い者に悪の道から離れて生きるように警告しないなら、その悪い者は自分の不義のゆえに死ぬ。そして、わたしは彼の血の責任をあなたに問う。もしあなたが悪い者に警告を与えても、彼がその悪と悪の道から立ち返ることがないなら、彼は自分の不義のゆえに死ななければならない。しかし、あなたは自分のいのちを救うことになる。」語ることに責任があります。けれども、その結果は主が責任を取られるということです。

<sup>7</sup> そして、そこを去って、ティティオ・ユストという名の、神を敬う人の家に行った。その家は会堂の隣にあった。

異邦人のところに行くとパウロが言ったので、彼は、この神を敬う異邦人の家に行きました。会堂のすぐ隣にありました。そこで、集会を開いて行きました。大きな家であったに違いありません。そこで、嬉しいことが起こります。

<sup>8</sup> 会堂司クリスポは、家族全員とともに主に信じた。また、多くのコリント人も聞いて信じ、バプテス

マを受けた。

会堂の隣にあったので、会堂について施設だけでなく、礼拝の秩序を維持する会堂司にも福音が伝わりました。彼らが家族全員と共に主を信じたのです。ピリピのリディアや看守、もっと前には百人隊長コルネリウスも一家全員が信じました。そういった働きを神がしてくださることがある、ということです！そして、他のコリントの住民も来て、バプテスマを受けています。この時のことを話しているのでしょう、パウロはコリント第一 1 章で、クリスポにバプテスマを授けたことを話しています（14 節）。そして、こういった出来事があった後で、夜に主が幻の中に現れてくださいます。

<sup>9</sup> ある夜、主は幻によってパウロに言われた。「恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。  
<sup>10</sup> わたしがあなたとともにいるので、あなたを襲って危害を加える者はいない。この町には、わたしの民がたくさんいるのだから。」

午前礼拝でお話ししました、夜に主が現れ下さる時、それは、落ち込んでいる時、行き詰まっている時なのですが、その時にこれからの指針が主から示される時でもあります。口汚く罵られて、これまで恐れていたのがますますそうなったのでしょうか。自分がしていることは、神のみこころにかなっていることなのか？そう疑ったかもしれません。しかし、主は励まされる方です。私もしばしば、こういった励ましを受けます。福音の働きがうまく行かない時にこそ、主がはっきりと示して下さい、確かにこれはみこころなのだを確認し、前進できるのです。多くのクリスチャンが人間的に、うまく行っていないクリスチャンに対して、これが原因なのだよというのですが、それが聖霊の働きに逆行していることを知らないといけません。

パウロが気にしていたのは、物理的な危害でした。これは彼にとっては現実で、再び逃げる態勢でないといけませんか？と思ったことでしょうか。会堂の隣の家で起こっていることですから、ユダヤ人がいつぞや襲ってくるか分かりません。しかし、「わたしは、共にいる。危害を加える者はいない。」と主が保証してくださったのです。そして、わたしの民が多くいると言われました。そうであれば、ずっと語り続けなさいといけません！それで次の節です。

<sup>11</sup> そこで、パウロは一年六か月の間腰を据えて、彼らの間で神のことばを教え続けた。

信じていった人々、救われた人々が、主の中に堅く立って、そして整えられるべく、御言葉を教えに行きました。これまでの宣教地における滞在期間を考えると、すごい長い期間です。

### 3B 守られたパウロ 12-17

<sup>12</sup> ところが、ガリオがアカイアの地方総督であったとき、ユダヤ人たちは一斉にパウロに反抗して立ち上がり、彼を法廷に引いて行って、<sup>13</sup>「この人は、律法に反するやり方で神を拝むよう、人々を

そそのかしています」と言った。

危害が加えられるような事件が起こりました。パウロに反抗してユダヤ人たちが立ち上がり、法廷に引いて行ったのです。「ガリオ」は、ローマの有名な哲学者「セネカ」の兄でした。彼がアカイアの地方総督で、ここで裁判席に着いていました。コリントがアカイアの首都ですから、ここでの「法廷」は、ビーマ、あるいはベマと言われて、市場(アゴラ)の中央にある一段と高くなっている所です。この遺跡がコリントにばっちり残っています。コリントのアゴラは、ローマでも有数の広さがあったそうですが、そこに大きく立っています。

<sup>14</sup> パウロが口を開こうとすると、ガリオはユダヤ人に向かって言った。「ユダヤ人の諸君。不正な行為や悪質な犯罪のことであれば、私は当然あなたがたの訴えを取り上げるが、<sup>15</sup> ことばや名称やあなたがたの律法に関する問題であれば、自分たちで解決するがよい。私はそのようなことの裁判官になりたくはない。」<sup>16</sup> そうして彼らを法廷から追い出した。

ガリオの判断は、妥当なものです。ユダヤ人の律法についてのことですから、あなたがたで勝手に解決すればよいということです。これが、その時のローマの行政官の基本的な姿勢でした。ユダヤ人の間のことだから関与しない、というものです。総督ピラトの時からそうでしたね、ローマ法によって裁きようがないのです。けれども、後にキリスト者が増えて行って、ローマが脅威に感じて、迫害を始めて行きます。けれどもこうやって、主は確かに、パウロを危害から守ってくださいました。

<sup>17</sup> そこで皆は会堂司ソステネを捕らえ、法廷の前で打ちたたいた。ガリオは、そのようなことは少しも気にしなかった。

ソステネは、クリスポが主を信じたので、彼の次に会堂司になっていたのでしょう。この彼が求道していたのでしょうか、自分たちで解決せよとガリオが言うので、自分たちで勝手に打ちたたいたのです。ガリオは、自分の管轄外のことですから、気にもせませんでした。また、ユダヤ人に対する反感というのは、あったでしょうね。無理やり追い出し、打ち叩かれるのを見ても、勝手にせいとしていましたから。

何と可哀そうなことかと思いますが、このソステネ、何とコリント第一 1 章 1 節に出てきます！「神のみこころによりキリスト・イエスの使徒として召されたパウロと、兄弟ソステネから、」コリント人への手紙はエペソにいる時にパウロが書いていますから、ソステネは信じて、パウロと一緒に旅をしたか、あるいは、エペソの合流したのでしょう。口述筆記をしています。こんな困難なことがあっても、それでも主を信じ、従ったのです。

## 2A エペソ宣教へ 18-28

### 1B 短期間の滞在 18-23

<sup>18</sup> パウロは、なおしばらく滞在してから、兄弟たちに別れを告げて、シリアへ向けて船で出発した。プリスキラとアキラも同行した。パウロは誓願を立てていたの、ケンクレアで髪を剃った。

ついに、第二宣教旅行の終わりに近づきます。彼はシリアに向けての旅を始めました。つまり、自分を送り出したアンティオキアに戻る旅です。ここで、「プリスキラとアキラも同行した」とあります。興味深いことに、他のパウロの手紙の箇所でも、夫婦の名前が妻のプリスキラが先に来ることがあります。もしかしたら、夫が主に天幕づくりの仕事をしていて、妻が神の御言葉に仕えていたということも考えられます。女性の働き人で、夫も関わるけれども、主に夫が生計を立てて、妻を助けるということはありません。

そして、「パウロは誓願を立てていたの、ケンクレアで髪を剃った。」と言っています。これは興味深いことで、パウロはユダヤ人であり、ディアスポラのユダヤ人です。ユダヤにいない遠くで生きているユダヤ人をディアスポラ・ユダヤ人と言いますが、彼らはよく、エルサレムの祭りに上る金銭的、時間的余裕がない時は、誓願を立てることがあります。これは、民数記 6 章にある、ナジル人の請願で、自分が献身の誓いを立てる、あるいは感謝を献げる時に、誓願の期間を設けます。誓願の期間が終わったら、髪の毛を剃って、神殿でいけにえと共に燃やします。パウロが、宣教の働きをしている時に、何を考えていたのでしょうか？ 危害が加えられないと約束されて、実際に加えられなかったの、感謝の請願を捧げていたのかもしれませんが、この髪の毛をもって、エルサレムの神殿で燃やすつもりだったのでしょうか。

「ケンクレア」とありますが、これがコリントのエーゲ海のほうの港がある町です。ここ出身の「フィベ」という女執事、あるいは執事の妻が、ローマ 16 章のところ出てきます。彼女がローマ人への手紙を、コリントにいたパウロから受け取って、ローマに持って行きます。ここにも教会がありました。今も、ビザンチン時代の教会堂が、ケンクレアの海岸に波に打たれながら遺跡として残っています。

<sup>19</sup> 彼らがエペソに着くと、パウロは二人を残し、自分だけ会堂に入って、ユダヤ人たちと論じ合った。

パウロは、エルサレムに向かおうとしています、その途中でエペソに立ちよっています。直行便がないからでしょう、コリントの港であるケンクレアとエペソの間は多くの船が行き交っていました。エペソは、アジアと欧州を結ぶ重要な港です。この町については、次回、19 章で詳しくご紹介したいと思います。ここで、次の船を待つ間、会堂に入って論じ合っています。ところで、第二次宣教旅行の始め、パウロはアジアに行こうとして、御霊がそれを禁じていました。その町にとうとう着きました。

<sup>20</sup> 人々は、もっと長くとどまるように頼んだが、パウロは聞き入れず、<sup>21</sup>「神のみこころなら、またあなたがたのところに戻って来ます」と言って別れを告げ、エペソから船出した。

エペソの人たちは反対しないどころか、求道を始めました。けれどもパウロは、「みこころなら」と言っています。これは、なんか「来られるかどうか分からないけれども、まあそうしておくよ」というものではなく、真剣に考えていたものです。本当に行こうと思って、19 章では第三次宣教旅行でエペソに到着した様子から始まります。

<sup>22</sup> それからカイサリアに上陸してエルサレムに上り、教会にあいさつしてからアンティオキアに下って行った。

パウロがエペソに留まらなかった理由は、エルサレムに行くことです。そこで、教会に挨拶をしたかったのです。そうパウロは、エルサレムの教会との交わりを決して忘れていませんでした。ユダヤ人と異邦人のキリストにある一致です。カイサリアにまず行っていますが、それはユダヤに行くには、大きな港であるし、ユダヤ属州の首都ですから。カイサリアの遺跡には、その船着き場の遺跡も残っています。

<sup>23</sup> パウロはアンティオキアにしばらく滞在した後、また出発し、ガラテヤの地方やフリュギアを次々に巡って、すべての弟子たちをカづけた。

エルサレムを訪問した後、陸路でアンティオキアまで行きました。数か月滞在したのでしょう。ついに第三宣教旅行を始めます。ガリラヤの地方、それから以前はトロアスに行ったのですが、そのままフリュギア地方に行きます。コロサイやラオディキアがあるところです。そして、そのまま西に行くことエペソです。その間にいる弟子たちを次々とカづけていました。

## 2B 種を蒔いた人たち 24-28

ルカは、エペソに留まったプリスキラとアクラの話の続けます。そして、エペソでの働きは、パウロによって始まるのではなく、アポロというユダヤ人によって始まることを見て行きます。

<sup>24</sup> さて、アレクサンドリア生まれでアポロという名の、雄弁なユダヤ人がエペソに来た。彼は聖書に通じていた。

アポロは、「アレクサンドリア生まれ」だということが大事です。アレクサンドリアは、ギリシアの時代から学問に長けているところでした。そしてユダヤ人の共同体も大きなものがありました。後にキリスト教の初代教父もここから排出されます。それで、その町出身のアポロは、雄弁でありました。弁論を身に着け、また聖書の知識もしっかりとあったのです。

<sup>25</sup> この人は主の道について教えを受け、霊に燃えてイエスのことを正確に語ったり教えたりしていたが、ヨハネのバプテスマしか知らなかった。<sup>26</sup> 彼は会堂で大胆に語り始めた。それを聞いたプリスキラとアクラは、彼をわきに呼んで、神の道をもっと正確に説明した。

正確にイエスのことを語ったり、教えていたのですが、また霊に燃えて語っていました。ところが、「ヨハネのバプテスマしか知らなかった」とあります。これが一体、どういうことを示しているかと言いますと、これは、19 章を見ないと分かりません。パウロがこの後でエペソに来ます。そして、「信じたとき、聖霊を受けましたか。」と尋ねています。聞いたことがないというので、「どのようなバプテスマを受けたのですか？」と尋ねます。それでヨハネのバプテスマだと答えるので、「19:5 主イエスの名によってバプテスマを受けた。」とあります。そして、彼らに聖霊が臨みました。つまり、これは聖霊のバプテスマの約束の事です。ヨハネは水でバプテスマを授けたが、イエスは聖霊によってバプテスマを授けるという約束です。その他のことは正確にすべて語っていたけれども、使徒の働き 1 章にある、聖霊のバプテスマの約束をまだ教えていなかったということです。

それで、プリスキラとアクラは脇に彼を呼びました。すばらしいですね、人の前で恥ずかしい思いをさせないために配慮しています。そして、神の道をもっと正確に説明したのです。

<sup>27</sup> アポロはアカイアに渡りたいと思っていたので、兄弟たちは彼を励まし、彼を歓迎してくれるようにと、弟子たちに手紙を書いた。彼はそこに着くと、恵みによって信者になっていた人たちを、大いに助けた。<sup>28</sup> 聖書によってイエスがキリストであることを証明し、人々の前で力強くユダヤ人たちを論破したからである。

アポロはこの後にアカイアに行きます。パウロとは逆方向ですね。エペソから働きを始め、コリントの方に行ったのです。当時は手紙による推薦で彼が変な教師ではないことを信頼してもらうために行っていました。

そして、彼はパウロなどが労して開拓したところ、種を蒔いたところに、大いに助けとなりました。彼が育てていく働きをしたのです。そして、さらに伝道、弁証の働きも進み、ユダヤ人たちを論破していきました。パウロが、このような働きをコリント人への手紙第一で、次のように説明しています。「1 コリ 3:6 私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。」アポロが水を注ぎ、パウロは種を植えたのです。エペソではその反対で、パウロが水を注ぎ、アポロが種を蒔いたのです。このようにして、神の畑は育って行ったということです。さらに、アクラとプリスキラも用いられ、アポロに説明しました。こうやって、働き人の間で協力があり、励ましがあります。人為的なものではなく、神のなされる配剤というか、アレンジですね。